

子どものスポーツに関する研究(Ⅱ)

—勝敗観とクラブ参加状況の関係について—

藤原 誠¹⁾

A Study on the Sports of Children (Ⅱ)

—The Relationship between the View about Victory or Defeat

and the State of Participation in Club—

Makoto Fujiwara¹⁾

Key words : Children, Sports Club, Victory or Defeat

キーワード：子ども スポーツクラブ 勝敗

I. 緒 言

今日の子どもたちは多忙な日々を過ごしている。第2, 第4土曜日を休日とする週休2日制が取り入れられるようになったとはいえ, 学校教育は子どもの日常生活の大きな部分を占めている。これに加えて, 有名校への進学をめざしたり, 学歴社会におくれをとることを恐れて, 学習塾に通う子どもも増加している。さらに, 子どもに対する教育熱は, 学習塾での勉強だけでなく, 芸術や文化, あるいはスポーツの領域におよび, 各種のおけいごとやスポーツクラブなどの活動もさかに行われるようになってきた^{3) 7)}。このような状況の中で, 子どもたちが仲間集団を形成し, 遊びの時間を共有することはきわめて困難になっているといえよう。その結果として, 子どもの遊びが変化・衰退していることがしばしば指摘されている^{1) 8)}。

子どもの組織的スポーツは, 子どもの自由な遊びを成立させる時間を奪うという側面をもつ反面, 現在の子どもの遊びで失われつつある, 集団性や身体活動性を備えており, 遊びの機能を補完するものとして捉えることもできる。また, 長期的視点に立ち, 生涯にわたってスポーツを実施するという観点からすると, 子ども時代にスポーツに親しみ, スポーツに対して良いイメージを形成することは, たいへん意味のあること

であろう。

しかしながら, 子どもの組織的スポーツ活動の現状をみると, 試合での勝利を何よりも重視する勝利至上主義的な傾向や, それに起因する子どもの発達段階を考慮しない練習や試合の実施, スポーツ障害の発生など, 多くの問題をかかえていることも事実である^{5) 10)}。子どもの中には, 一度スポーツクラブに加入して活動を開始したにもかかわらず, さまざまな理由によって, スポーツクラブを離脱していく者も少なくない。離脱した者に比べて, スポーツクラブの活動を継続的に実施している者は, 勝利至上主義的傾向や勝利追求の姿勢を望ましいものとして是認する傾向が強いことが明らかになっている³⁾。離脱した者は, このような勝利追求の姿勢が漂うクラブの雰囲気やクラブの活動についていけず, 離脱したとも考えられる。このように考えると, スポーツクラブ内に存在する過度の勝利追求の姿勢は子どものスポーツの継続的实施を左右する重要な要素であるといえよう。そこで本研究では, クラブの勝利追求の姿勢を構成している子どもたちの勝利追求の姿勢が, どのような要素との関連の中で形成されているのかを知る手がかりを得るために, スポーツクラブに加入している子どものスポーツにおける勝敗観(勝利志向)とクラブでの活動状況や活動意識との関係を検討することを目的とした。

1) 愛媛大学教育学部
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho, 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577,
Japan

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象

調査対象は愛媛県松山市の小学校4校の5年および6年の児童1,214名である。

2. 調査方法

質問紙による配票調査を実施した。学級担任を通して配票、回収を行った。有効標本数は947であった。

3. 調査時期

1996年7月に実施した。

4. 調査内容

学校の部活動、または学外のスポーツクラブに加入している者には、遊び・学習塾・けいこごとの状況、スポーツにおける勝敗観、スポーツクラブでの活動状況・活動意識、父母の関与状況などについて調査した。今回の分析の対象とはならないが、スポーツクラブ離脱者には、遊び・学習塾・けいこごとの状況、スポーツにおける勝敗観、加入していた当時の活動状況・活動意識、父母の関与状況などについて、スポーツクラブへの加入経験がない者には、遊び・学習塾・けいこごとの状況、スポーツにおける勝敗観などについて調査している。

5. 分析の視点

本研究では、スポーツクラブに加入している者を対象として、スポーツにおける勝敗観（勝利志向）とスポーツクラブでの活動状況、活動意識との関係を検討することを目的とするため、スポーツクラブからの離脱者、および、スポーツクラブへ加入した経験がない者は分析の対象外となる。

スポーツクラブへの加入者は384名であり、この加入者を、スポーツにおける勝敗観を示す考え方⁶⁾に対する賛否により、勝利を重視する傾向が強い強勝利志向群、中程度の中勝利志向群、勝利を重視する傾向が弱い弱勝利志向群に分類した。具体的には、分類は次の要領で行った。勝利至上主義的な考え方や勝利追求を積極的に是認する勝敗観を示す「試合にできるからには勝たねば意味がない」、「勝つためには、少々ずるいことをしてもしかたがない」、「勝つためには、へたな人のことなどかまっていられない」、「勝つつもりで試合をしないと、よいプレイはできない」、「勝とうと思うから、一生懸命に試合ができるのである」、「試合に勝ってこそ、他

のみんなから認められるものである」に対して、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそうは思わない」、「そうは思わない」と回答した者に、それぞれ、順に、4点、3点、2点、1点を与え、その合計得点が17～24点の130名を強勝利志向群、14～16点の132名を中勝利志向群、6～13点の122名を弱勝利志向群とした。そして、分析に際しては、勝利重視傾向による差異をより鮮明にするために中勝利志向群を除き、強勝利志向群と弱勝利志向群を比較しながらクラブでの活動状況や活動意識について検討することにした。

Ⅲ. 結果と考察

1. スポーツクラブでの活動実態

(1) 加入の契機

スポーツクラブへの加入の契機を示したものが表1である。表中では強勝利志向群、弱勝利志向群をそれぞれ強勝利、および弱勝利と表記することにする。表1をみると、強勝利志向群、弱勝利志向群のいずれにおいても、自分がやりたかったからスポーツクラブに加入したという者が多く、他者の勧めで加入した者は20～30%程度となっている。両群を比較すると、強勝利志向群の方に自分の意志で加入を決めた者がやや多くなっている。しかし、 χ^2 検定により勝利志向の強弱と加入の契機との関係を検討したが、両者間に関連は認められなかった。

以上のことから、勝利に対する志向の程度、勝利志向の強弱は、スポーツクラブへの加入に至る経緯よりも、加入後の活動との関わり方、活動への取り組み方によって決まってくるように思われる。

表1 加入の契機

項目	分類		
	強勝利	弱勝利	合計
自分がやりたかったから	79.5	73.1	76.4
だれかにすすめられたから	20.5	26.9	23.6

n.s.

(χ^2 検定による。以下同じ)

(2) 活動継続期間

スポーツクラブの活動をどのくらいの期間続けているか、その活動継続期間を示すと表2のようになる。調査対象が5・6年生であり、学校の部活動が4年生以上を対象としている関係からか、

1年以上2年未満の者や2年以上3年未満の者が多い。強勝利志向群と弱勝利志向群を比較すると、弱勝利志向群の方に1年未満の者がやや多く、強勝利志向群の方に2年以上3年未満の者や3年以上の者がやや多くなっている。このように強勝利志向群の方が継続期間が若干長い傾向を示しているが、検定の結果、勝利志向の強弱と活動の継続期間の長短には関連は認められなかった。今回の調査対象者の活動継続期間の差異が、全体としてあまり大きくないことが、このような結果をもたらしたように思われる。

表2 継続期間 (%)

項目	分類	強勝利	弱勝利	合計
1年未満		15.0	21.8	18.3
1年以上2年未満		34.6	35.4	34.9
2年以上3年未満		33.1	27.7	30.5
3年以上		17.3	15.1	16.3

n. s.

(3) 活動日数・活動時間

所属するスポーツクラブのふだんの活動日数を示したものが表3である。スポーツ少年団をはじめとする子どものスポーツクラブの活動日数の多さはよく指摘される場所であるが²¹⁾、本調査でも、週に5日以上活動しているとする者は40%以上に及んでいる。

強勝利志向群と弱勝利志向群を比較すると、週に1~2日、あるいは週に3~4日という比較的少ない日数をあげた者は弱勝利志向群にやや多く、毎日と回答した者は強勝利志向群に多い。このように強勝利志向群の方がふだんの活動日数が多い傾向を示しているが、検定の結果、勝利志向の強弱と活動日数の多寡には関連は認められなかった。

表3 活動日数 (%)

項目	分類	強勝利	弱勝利	合計
週に1~2日		9.2	14.3	11.6
週に3~4日		40.8	46.2	43.5
週に5~6日		33.8	33.6	33.7
毎日		16.2	5.9	11.2

n. s.

次に、所属するスポーツクラブの活動時間を見ると表4および表5のようになる。表4は平日の活動時間、表5は日曜日の活動時間を示している。平日では強勝利志向群、弱勝利志向群のいずれにおいても2時間以上3時間未満の者が最も多く65~72%を占めている。3時間以上の者は強勝利志向群の方が若干多くなっているが、勝利志向の強弱と平日の活動時間の長短に関連は認められなかった。日曜日の活動時間を見ると、両群とも3時間以上4時間未満の者が40%程度を占めて最も多い。両群を比較すると、比較的短時間となる3時間未満の者は、弱勝利志向群では24.7%、強勝利志向群では14.8%であり、弱勝利志向群の方がやや多くなっている。他方、比較的長時間となる4時間以上5時間未満、あるいは、5時間以上の者は強勝利志向群の方がやや多くなっている。このように、強勝利志向群の方が日曜日の活動時間がやや長い傾向がみうけられるが、検定の結果、勝利志向の強弱と日曜日の活動時間の長短に関連は認められなかった。

表4 平日の活動時間 (%)

項目	分類	強勝利	弱勝利	合計
2時間未満		11.7	9.6	10.7
2時間以上3時間未満		65.0	72.0	68.4
3時間以上		23.3	18.4	20.9

n. s.

表5 日曜日の活動時間 (%)

項目	分類	強勝利	弱勝利	合計
3時間未満		14.8	24.7	19.5
3時間以上4時間未満		42.0	41.1	41.6
4時間以上5時間未満		13.6	8.2	11.0
5時間以上		29.6	26.0	27.9

n. s.

以上のように、子どもの勝利志向の強弱と所属するクラブの活動日数や活動時間との間には、検定の結果、関連は認められず、所属クラブの活動日数の多さや活動時間の長さが、子どもたちの勝利志向の高さに直接的に関係しているとはいえなかった。しかし、その分布の状況を見ると、強勝利志向群の方が、クラブの活動日数や活動時間がやや多い傾向を示しており、活動日数や活動時間

が多いことが子どもの勝利志向を高める可能性があることを示唆しているとも受け取れる。

(4) 活動への参加状況と活動の楽しさ

活動への参加状況を示すと表6のようになる。強勝利志向群では、いつも参加するという参加頻度の高い者が最も多く57.7%を占めている。そして、半々くらい、あるいは、参加しないことが多いという参加頻度の低い者は3.8%にとどまっている。他方、弱勝利志向群では、たまに休むという者が49.1%で最も多く、いつも参加するという参加頻度の高い者は40.2%であり、強勝利志向群より少ない。そして、半々くらい、あるいは、参加しないことが多いという参加頻度の低い者は10.7%を占め、強勝利志向群より多くなっている。このように両群を比較すると、強勝利志向群の方が活動への参加頻度が高く、活動に熱心に取り組んでいることがわかる。このような、活動への積極的な参加、取り組みが子どもの勝利志向を高めているものと思われる。

表6 活動への参加頻度

項目	分類		
	強勝利	弱勝利	合計
いつも参加する	57.7	40.2	49.2
たまに休む	38.5	49.1	43.7
半々くらい 参加しないことが多い	3.8	10.7	7.1

p<0.01

次に、スポーツクラブの活動の楽しさについて尋ねた結果を表7に示した。強勝利志向群、弱勝利志向群のいずれにおいても、スポーツクラブの活動がとても楽しい、あるいは、まあ楽しいという者は90%を越え、スポーツクラブの活動が多くの子どもたちにとって楽しい活動となっていることがわかる。両群を比較すると、強勝利志向群の方に、とても楽しいという者がやや多くなっているが、勝利志向の強弱と活動の楽しさとの間に関連は認められなかった。

表7 活動の楽しさ

項目	分類		
	強勝利	弱勝利	合計
とても楽しい	66.2	55.4	60.8
まあ楽しい	28.3	37.2	32.7
あまり楽しくない 楽しくない	5.5	7.4	6.5

n.s.

(5) 技能レベルと選手経験

クラブの中での技能レベルをみると表8のようになる。クラブの中でうまい方であるとする者は強勝利志向群では21.5%、弱勝利志向群では10.1%となっており、強勝利志向群は弱勝利志向群の約2倍となっている。どちらかといえばうまい方であるとする者も弱勝利志向群が39.5%であるに対して強勝利志向群では46.9%を占め、強勝利志向群の方が多くなっている。このように、強勝利志向群の方が自己の技能レベルが高いとする者が多い。この結果や既述の活動への参加状況をあわせて考えると、勝利志向の強い者は、活動によく参加し、技能レベルが高い者であるといえよう。活動に積極的に参加し、技能レベルが高くなるにしたがって、勝利を求める傾向が強くなっていくことが推察される。

表8 クラブ内での技能レベル

項目	分類		
	強勝利	弱勝利	合計
うまい方	21.5	10.1	16.1
どちらかといえばうまい方	46.9	39.5	43.4
どちらかといえばへたな方	28.5	35.3	31.7
へたな方	3.1	15.1	8.8

p<0.001

表9は大会時の選手としての試合出場について尋ねた結果を示している。強勝利志向群では、いつも選手として出るという者が58.4%を占め、他の選択肢に比べて回答者が著しく多い。選手として出ることが多いという者を加えると、72.0%の者が豊富な試合出場経験をもっていることになる。これに対して弱勝利志向群では、いつも選手として出るという者は37.4%、選手として出ることが多いという者は13.4%であり、豊富な試合出場経験をもっている者は50.8%となっている。この値は強勝利志向群より少ない。弱勝利志向群では選手として試合に出場することがないという者も30%程度おり、強勝利志向群の方が大会時の選手としての試合出場経験が多いという結果となった。このことから考えて、選手として試合にでることによって勝利志向が高まっていくことが推察される。

表9 選手としての大会・試合出場

項目	分類			合計
	強勝利	弱勝利	合計	
いつも選手として出る	58.4	37.4	48.5	
選手として出ることが多い	13.6	13.4	13.5	
選手として出ることが少ない	18.4	18.8	18.6	
選手として出ることがはない	9.6	30.4	19.4	

p<0.001

2. スポーツクラブでの活動意識

(1) クラブ加入の功罪

子どもたちにとってスポーツクラブの活動は、集団でのスポーツをはじめとする様々な活動を通して、スポーツのもつ楽しさを味わうとともに、生活領域を広げ、種々の能力を養成する、有用な活動といえよう。しかし、そのスポーツクラブの活動も、活動のしかたによっては、子どもたちに好ましくない影響をもたらすことはよく指摘されるところである¹¹⁾。子どものスポーツクラブの功罪論は、子どもを取り巻くおとなの立場から論じられることが多いが、ここでは、子どもの立場に立ち、子ども自身が感じている、スポーツクラブの活動のメリット、デメリットについて検討する。

子どもたちがスポーツクラブに入ってよかったと思うことは、表10に示す内容となっている。

表10 よかったこと

項目	分類			合計
	強勝利	弱勝利	合計	
そのスポーツがうまくなった	59.2	45.1	52.4	
体がじょうぶになった	37.7	41.0	39.3	
友だちができた	34.6	39.3	36.9	
体育がとくいになった	10.8	9.0	9.9	
試合で勝った	13.1	2.5	7.9	
根性がついた	7.7	7.4	7.5	
試合でいろいろなところへ行けた	7.7	4.9	6.3	
れいぎ正しくなった	3.8	9.0	6.3	
積極性が身についた	3.8	7.4	5.6	
その他	1.5	2.5	2.0	

強勝利志向群、弱勝利志向群のいずれにおいても、「そのスポーツがうまくなった」ということ

をあげる者が最も多くなっている。次いで、「体がじょうぶになった」こと、「友だちができた」ことをあげる者が多い。両群を比較すると、「そのスポーツがうまくなった」ことをよかったこととしてあげる者が強勝利志向群の方に多く、さらに特徴的なこととして、強勝利志向群の方に「試合で勝った」ことをよかったこととしてあげる者が多いということが指摘できる。このように強勝利志向群ではスポーツの技能や試合での勝敗に関心を寄せ、スポーツの技能が高まることや、試合での勝利に喜びを感じている者が多いといえよう。

次に、スポーツクラブに入ってよくなかったと思うことについてまとめると、表11のようになる。両群とも「友だちと遊べなくなった」ことをあげる者が最も多く、次いで、「練習や試合でつかれる」こと、「家族といる時間が少なくなった」ことをあげる者が多い。強勝利志向群では弱勝利志向群に比べて、時間的余裕がなくなることから生じる、「友だちと遊べなくなった」ことや「テレビを見る時間が少なくなった」ことをあげる者が多い傾向にある。これは、既にみたように、強勝利志向群の方がスポーツクラブへの参加頻度が高く、積極的に活動へ参加していることに関係しているように思われる。

表11 よくなかったこと

項目	分類			合計
	強勝利	弱勝利	合計	
友だちと遊べなくなった	54.6	43.4	49.2	
練習や試合でつかれる	23.8	32.0	27.8	
家族といる時間が少なくなった	20.8	18.9	19.8	
よくけがをする	15.4	13.1	14.3	
練習や試合などが学校や地域の行事とかさなってしまう	11.5	13.9	12.7	
テレビを見る時間が少なくなった	14.6	5.7	10.3	
態度や言葉づかいがらんぼうになった	4.6	1.6	3.2	
学校の成績がさがった	3.1	2.5	2.8	
その他	3.1	2.5	2.8	

(2) 活動の目標

次に、子どもたちが今どのような目標をもってスポーツクラブの活動に参加しているのかを示し

たものが表12である。弱勝利志向群では「健康や体力をつける」が36.9%を占めて最も多くなっている。また、弱勝利志向群では「みんなとなかよく活動する」ことを目標としてあげる者が強勝利志向群に比べて多い。これに対して強勝利志向群では「大会・試合で勝つ」が最も多くなっており、「大きな大会に出場する」ことを目標としている者も弱勝利志向群に比較して多い。このように、強勝利志向群では、一般的なスポーツ勝敗観として試合での勝利を重視するだけでなく、自分自身の活動に際しても、大きな大会に出場したり、大会や試合で勝つことなどを目標としている者が多く、勝利追求の姿勢が強くみられる。

表12 活動の目的

項目	分類	M.A. (%)		
		強勝利	弱勝利	合計
健康や体力をつける		23.8	36.9	30.2
いろいろな技術を身につける		23.1	25.4	24.2
大会・試合で勝つ		33.1	10.7	22.2
将来プロの選手になる		23.1	16.4	19.8
選手(レギュラー)になる		16.9	20.5	18.7
スポーツを楽しむ		16.9	19.7	18.3
みんなとなかよく活動する		11.5	22.1	16.7
大きな大会に出場する		22.3	9.0	15.9
精神をきたえる		3.8	11.5	7.5
その他		0.0	2.5	1.2

(3) 指導者の目標

表13は、指導者がどのような目標をもって指導しているのかを、子どもの立場から、子どもたちがどのように捉えているのかを示している。したがって、指導者が実際に目標としている内容と異なっている可能性もあるが、現実の活動のなかで、子どもたちが指導者の言動から肌で感じ取っている、子どもの立場からみた指導者の目標ということになる。これをみると、両群とも「いろいろな技術を身につけさせる」ことをあげる者が多くなっているが、これに加えて、弱勝利志向群では「スポーツの楽しさを味わわせる」こと、強勝利志向群では「大会・試合で勝たせる」ことをあげる者が多い。さらに、強勝利志向群では「大きな大会に出場させる」ことをあげる者も弱勝利志向群より多くなっている。強勝利志向群の子どもでは、指導者が勝利を目指して指導をしていると

認識している者が多いといえよう。このように、子どもの勝利志向と子どもが認識している指導者の勝利志向は関連しており、指導者の勝利志向との一体感が、子どもたちの勝利志向を支えているように思われる。

表13 指導者の目標

項目	分類	(%)		
		強勝利	弱勝利	合計
いろいろな技術を身につけさせる		24.6	23.5	24.1
大会・試合で勝たせる		31.1	9.9	21.0
スポーツの楽しさを味わわせる		11.5	22.5	16.7
精神的に成長させる		8.2	17.1	12.4
大きな大会に出場させる		14.8	5.4	10.3
みんなでなかよく活動させる		5.7	14.4	9.9
健康や体力をつけさせる		4.1	7.2	5.6

p<0.001

(4) 離脱意志

スポーツクラブをやめたいと思うことがあるか、クラブからの離脱の意志について尋ねると表14のようになった。スポーツクラブをやめたいと思うことがよくある、または、ときどきあるという者は合わせて40%程度、やめたいと思うことがないという者は60%程度となっており、強勝利志向群、弱勝利志向群とも、同じような傾向を示している。

次に、スポーツクラブをやめたいと思うことがよくある、または、ときどきあるという者に対して、やめたいと思うのはどんなときかを尋ねると、表15のような結果となった。弱勝利志向群では、「友だちと遊べないとき」をあげる者が最も多く、次いで「練習や試合でつかれたとき」をあげる者が多い。これに対して強勝利志向群では、「指導者にしかられたとき」をあげる者が最も多く、次いで、弱勝利志向群と同じように「練習や試合でつかれたとき」をあげる者が多い。「練習や試合でつかれたとき」をあげる者が多いのは、子どものスポーツクラブの練習や試合の多さを反映したものとして捉えることができよう。強勝利志向群において特徴的なのは、指導者にしかられたときにやめたいと思う者が多いということであろう。勝利志向の強い子どもは、指導者との一体感が強く、指導者とともに勝利を目指して活動しているという意識が強いために、指導者にしかられたときに、大きな精神的打撃を受けるというこ

となのであろう。勝利志向の強い子どもほど、指導者の存在は大きなものとなっており、指導者の適切な対応が求められることになろう。

表14 やめたいと思うこと (%)

項目	分類		
	強勝利	弱勝利	合計
よくある	5.4	3.3	4.4
ときどきある	33.4	39.7	36.4
ない	61.2	57.0	59.2

n.s.

表15 やめたいと思うとき M.A. (%)

項目	分類		
	強勝利	弱勝利	合計
友だちと遊べないとき	22.0	36.5	29.4
練習や試合でつかれたとき	28.0	28.8	28.4
指導者にしかられたとき	34.0	21.2	27.5
試合で失敗したとき	10.0	5.8	7.8
練習の内容がむずかしくて、ついていけないと思ったとき	8.0	7.7	7.8
部活やスポーツクラブなどのことで親にしかられたとき	8.0	7.7	7.8
けがをしたとき	8.0	5.8	6.9
試合に出してもらえないとき	2.0	9.6	5.9
友だちがやめたとき	8.0	3.8	5.9
学校の成績がさがったとき	0.0	1.9	1.0
その他	14.0	13.5	13.7

Ⅳ. 結 語

本研究では、子どものスポーツクラブに内在する勝利志向を、子どもの勝利志向という観点から捉えた。子どもがもつ勝利追求の姿勢が、どのような要素との関連の中で形成されるのかを検討するために、子どもがもつスポーツにおける勝敗観(勝利志向)とクラブでの活動状況、活動意識との関係について考察した。

結果の概要は以下のようにまとめることができる。

- (1) 子どもの勝利志向の程度とスポーツクラブへの加入の契機との間には関連は認められなかった。このことから考えて、勝利志向の強弱は、クラブへの加入に至る経緯よりも、クラブへ加入した後の活動への関わり方や取り組み方によって決まってくるよう

に思われる。

- (2) 子どもの勝利志向の程度とスポーツクラブでの活動継続期間、あるいは、子どもの勝利志向の程度と所属するスポーツクラブの活動日数、活動時間との間には、 χ^2 検定の結果、関連は認められなかった。しかしながら、その分布状況をみると、勝利志向の強い子どもの方が、活動継続期間がやや長く、クラブの活動日数や活動時間がやや多い傾向を示しており、活動を長く続けることや活動日数や活動時間の多いことが子どもの勝利志向を高める可能性があることをうかがわせる結果となっていた。

- (3) 子どもの勝利志向の程度とスポーツクラブへの本人の参加状況との関係では、勝利志向の強い子どもの方がスポーツクラブの活動への参加頻度が高く、活動に熱心に取り組んでいた。このような活動への積極的な参加や取り組みが、子どもの勝利志向を高めているものと思われる。

- (4) クラブ内での技能レベルや選手としての試合出場状況については、勝利志向の強い子どもの方が技能レベルが高く、試合に選手として出場する頻度が高くなっていった。技能レベルが高くなり、試合への出場が多くなるほど、勝利を追求する姿勢が強まり、勝利志向が強くなるものと考えられる。

- (5) スポーツクラブでの活動意識についてみると、スポーツクラブに入ってよかったこととして、勝利志向の強い子どもでは「そのスポーツがうまくなったこと」や「試合で勝ったこと」をあげる者が多く、スポーツの技能や試合での勝敗に関心を寄せ、スポーツ技能の高まりや試合での勝利に喜びを感じている者が多くみられた。

- (6) スポーツクラブでの活動目標についてみると、子どもがもっている目標としては、勝利志向の強い子どもでは、「大会・試合で勝つ」ことや「大きな大会に出場する」ことをあげる者が多く、勝利志向の強さを反映する結果となっていた。また、子どもが捉えている指導者の活動目標としては、勝利志向の強い子どもでは、「大会・試合で勝たせる」ことや「大きな大会に出場させる」ことをあげる者が多くなっており、指導者が勝利を目指して指導していると認識している者が多くなっていった。指導者の勝利志向との一体感が、子どもたちの勝利志向を支えているように思われる。

参考文献

- 1) 安藤明人(1994)子どもの日常世界と仲間遊び。子安増生・山田富美雄編 ニューメディア時代の子どもたち。有斐閣：東京、pp.71-78。

- 2) 藤田雅文 (1992) スポーツ少年団の活動実態. 四国スポーツ研究会編 子どものスポーツ, その光と影—生涯スポーツに向けて—. 不昧堂出版: 東京, pp.53-62.
 - 3) 藤原誠 (1997) 子どものスポーツに関する研究—スポーツクラブからの離脱を中心に—. 愛媛大学教育学部保健体育紀要 1: 21-34.
 - 4) 藤原誠・堺賢治 (1989) スポーツ少年団の指導者に関する研究. 愛媛大学教養部紀要 22: 69-70.
 - 5) 原瀬瑞夫 (1991) スポーツ少年のからだの実態. 城丸章夫・水内宏編 スポーツ部活はいま. 青木書店: 東京, pp.119-152.
 - 6) 賀川昌明 (1985) 少年スポーツをめぐる諸問題. 日本スポーツ心理学会第12回大会ワークショップ資料.
 - 7) 前田健一・堺賢治・藤原誠・讃岐幸治 (1997) 子どもの生活と教育実習. カリキュラム改革研究プロジェクト編 子どもたちにとっての教育実習. 愛媛大学教育学部附属教育実践研究指導センター・第二部門, pp.163-167.
 - 8) 牧野暢男 (1994) 余暇生活の条件づくり(1)—子ども時代からの主体形成—. 一番ヶ瀬康子・蘭田碩哉・牧野暢男著 余暇生活論. 有斐閣: 東京, pp. 171-183.
 - 9) 増山均 (1997) 教育と福祉のための子ども観—〈市民としての子ども〉と社会参加—. ミネルヴァ書房: 京都, pp.105-111.
 - 10) 水内宏 (1991) 子どもたちのすこやかな発達と部活. 城丸章夫・水内宏編 スポーツ部活はいま. 青木書店: 東京, pp.27-43.
 - 11) 武藤芳照 (1985) スポーツ少年の危機. 朝日新聞社: 東京.
 - 12) 武藤芳照 (1989) 子どものスポーツ. 東京大学出版会: 東京, pp.83-110.
-